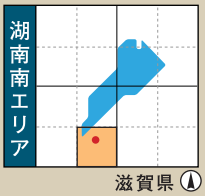
史跡
国指定

野路小野山製鉄遺跡（のじおのやませいてついせき）

草津市野路町　昭和60年10月26日指定



古代近江は鉄の産地として知られており『続日本紀』には「近江、鉄穴」の名が度々登場します。野路小野山製鉄遺跡は、同じ瀬田丘陵上にある近江国庁、瀬田国分寺などの存在や周辺の製鉄遺跡から、官営の工房として操業していたのではないかと思われます。遺構は7、8世紀頃の律令時代の鉄生産の実態を具体的に示しています。

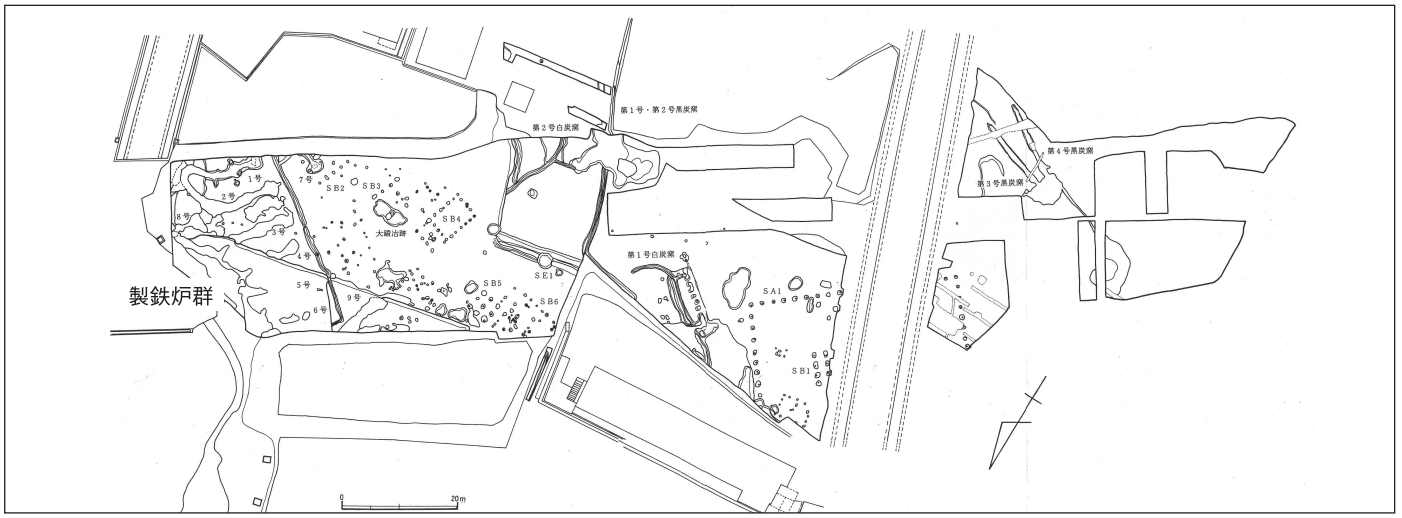
当時のできごと	
667年	近江大津宮に遷都
742年	紫香楽に宮を営む
764年	藤原仲麻呂の乱

野路小野山製鉄遺跡について

野路小野山製鉄遺跡は、草津市の東南部から大津市にかけて広がる瀬田丘陵の北西、湖成段丘の先端近くのなだらかな斜面にあり、この瀬田丘陵上には鉄や須恵器などを生産した遺跡が多数所在しています。

ほぼ東西方向に広がる指定区域からは製鉄炉が12基、木炭窯が6基確認されています。製鉄炉は基本的には同じ構造で、全長10m程度の規模となっています。炭窯群の間には、東西18間（約35m）、南北9間（約19m）余りの柵に囲まれた、3間×2間の総柱建物の管理棟か倉庫と考えられる一画もあります。また工房と考えられる掘立柱建物が7棟以上見つかっています。

ここでの鉄の生産は出土した土器類から、7世紀末から8世紀半ば頃の操業が考えられます。注目すべきは、多くの鉄鉱石（磁鉄鉱）が出土していることです。このことから砂鉄ではなく鉄鉱石を原料とした製鉄技術があったことが明らかになりました。瀬田丘陵では鉄鉱石の産地とは知られていないので、原料は大津市南部や高島郡を含む北部の山々から求められたのではないかと想定されています。



全体図



柵で囲まれた管理棟建物



整然と並ぶ製鉄炉群

製鉄炉の形態

野路小野山製鉄遺跡の発掘調査は、昭和54年（1979）度から56年（1981）度にかけて行われました。その調査の際には、遺構をできるだけ損なわないよう保存するため、1・7・9号炉に限定して調べました。律令時代の炉の形態には古墳時代からの伝統的な長方形箱型炉や、8世紀半ばに出現する半地下式竪型（たてがた）炉、その過渡期に出現している円形自立炉などがあります。これまで、この遺跡の製鉄炉は、比較的遺存状況が良好だった1号炉の状況から、円形自立炉ではないかと考えられていました。

しかし、平成12年（2000）度に行われた2号炉を対象にした調査で、炉の下部まで掘り込んだ結果、下部に設けられた石敷構造などから長方形箱型炉であることが判明しました。



第1号木炭窯焚口



第3号・第4号木炭窯全景（西より）



第1号炭窯全景（北より）

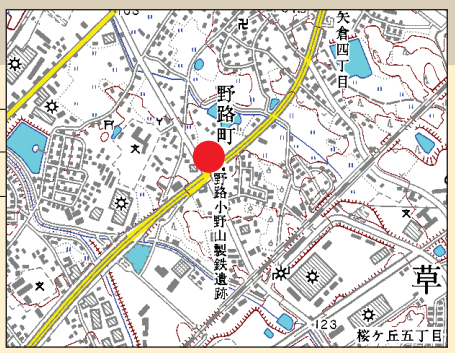
関連する文化財

木瓜原遺跡（草津市）	7世紀末から8世紀にかけての製鉄を中心とした製鉄遺跡
源内峠遺跡（大津市）	7世紀代の製鉄遺跡
山の神遺跡（大津市）	7世紀代から始まる須恵器や鴟尾を生産した遺跡

もっと深く知りたい

草津市教育委員会	☎077-561-2429	草津市草津3-13-30
滋賀県埋蔵文化財センター	☎077-548-9681	大津市瀬田南大萱町1732-2
立命館大学びわこ・くさつキャンパス	☎077-566-1111	草津市野路東1-1-1

野路小野山製鉄遺跡へのアクセス　JR琵琶湖線　瀬田駅または、南草津駅下車



【参考文献】〔図説日本の史跡〕同朋舎　〔野路小野山遺跡発掘調査報告書〕滋賀県教育委員会

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　平成16年3月